

## [モンゴル] モンゴルのコミュニティづくり

### ■モンゴルの都市と草原

モンゴル人は、モンゴル国・ロシア連邦・中国をはじめとする世界中に暮らす、モンゴル系の言語を話す人々である。本項目では、多くのモンゴル人が歴史的な故地とみなす「モンゴル国の草原」において、牧民がつくってきたコミュニティのあり方を記述する。

モンゴル国の人口は約300万人であるが、国土面積は日本の約4倍と広大である。民族構成については、人口の約4%がチュルク系言語を話し、イスラームを信仰するカザフ人であるが、その他のほとんどがモンゴル系の言語を話すモンゴル人であり、チベット仏教徒が多い。

全人口の約7割は都市部に住み、3割が草原で牧畜を営む。都市生活者の住居はコンクリートの集合住宅や移動式住居「ゲル」であるが、定住的に暮らす。一方、草原の牧民は主にゲルに住み、家畜のえさになる草を求めて移動生活する。草原と都市のつながりは密接で、親族間の協力関係のほか、県人会や郡人会といった同郷団体 (*nutgijn zovlol*) が草原と都市の人々を結びつけている。

### ■モンゴルの行政組織

モンゴルの行政組織には、全国に21の県 (*aimag*: 人口1~12万人)、その下に郡 (*sum*: おおむね1千~4万人)、その下に行政区 (*bag*: おおむね数百人) がある (2015年現在、モンゴル国統計局)。県と郡の中心地には行政府・病院・学校・銀行などの社会的なインフラが揃っている。牧民は特定の県・郡・行政区に登録されているが、季節移動のために越境することがある。

同じ自治体に属する人々が一堂に会する機会として、7月11日の革命記念日頃に県や郡が主催する伝統的競技大会「ナーダム」(競馬・相撲・弓) および、郡や行政区が季節ごとに開催する住民会議やダンスパーティーなどがある。なお、一部の郡や行政区は、昔ながらの自然崇拜の儀礼を行う集団と重なる。つまり、司祭の家系に属する者が中心となって、地域の人々が金品を持ち寄り、雨乞いや土地の「持ち主」に対する祭祀(オボ-祭り)を行うのである(写真)。



オボ-祭りの奉納相撲大会

また、同じ郡の出身者は、多くの場合、郡に1つある同じ学校で学んだ経験を共有している(尾崎1999)。

### ■草原のコミュニティ

モンゴルにおける最小の社会単位は、原則として夫婦と未婚の子どもからなる核家族=世帯である。平均約4人の家族が1つのゲルに住み、季節ごとのキャンプ地を決め、ほかの世帯とともに近接してゲルを立てて居住集団をなす。1つの居住集団においては、複数の世帯が家畜の群れを1つの群れとしてまとめ、共同で放牧する。このような家畜管理の協業集団を「ホト・アイル (*hot ail*)」とよぶ。

ホト・アイルのあり方には地域・時代による差異がみられる。地域別にみると、人口の多い森林性草原地域では、ホト・アイルを構成する世帯の数は多めだが、人口密度の低い砂漠性草原地域ではホト・アイルの規模は小さく、1世帯だけからなるキャンプも多い。

時代別にみると、社会主義期にはホト・アイルは、牧畜協同組合の家畜を飼養する生産単位として組織された。国家体制が転換した1990年代には、ホト・アイルは構成世帯数が多く、頻繁に構成の変わる流動的な集団であった(風戸2009)。たとえば1997年夏~1999年春にアルハンガイ県チョロート郡(森林性草原)で筆者が調査した75のホト・アイルを構成していた世帯の数は平均約4世帯であった。その背景として、当時は世帯あたりの家畜頭数がおしなべて少なかったことがあげられる。しかし2000年代以降は、富裕牧民の増加と経済格差の拡大を背景に、一群として管理できる家畜頭数などを考慮して、特定の1~2世帯だけでキャンプするケースが目立つようになった。

ホト・アイルに加え、季節的な労働力需要を満たす、数km範囲の地縁的な協業関係として「サーハルト・アイル」がある(尾崎1999)。さらに、ホト・アイルやサーハルト・アイルを包括する地域集団として、地形、とくに水資源に関係づけられた人々の集まりがあげられる。たとえば、1つの谷や川に沿ってキャンプする複数の世帯が「○○川の人々」、1つの井戸を共用する人々が「1つの水の人々(ネグ・オスニーハン)」とよばれる。そして、このようないくつかの水系集団のまとまりが上述した地方行政組織である行政区をなしているのである。

モンゴル国の草原においては「郡」、規模によっては「行政区」を、共通のアイデンティティを有するゆるやかな地域集団とみなしてよいだろう。とはいえ、牧民の社会関係はさらに、親族・学校の同級生・友人関係などによって、行政区・郡・県を超えて広がる。現在では、自家用車の普及と道路の整備、そして携帯電話やFacebook等のコミュニケーションツールの普及により、牧民は物理的な距離を超えて親族や友人とつながり、モノやサービスを融通し合う相互扶助を行っている。

◆風戸真理

### 参考文献

尾崎孝宏、1999、「世帯・親族と地域社会」島崎美代子・長沢孝司編『モンゴルの家族とコミュニティ 開発』日本経済評論社  
風戸真理、2009、『現代モンゴル遊牧民の民族誌』世界思想社